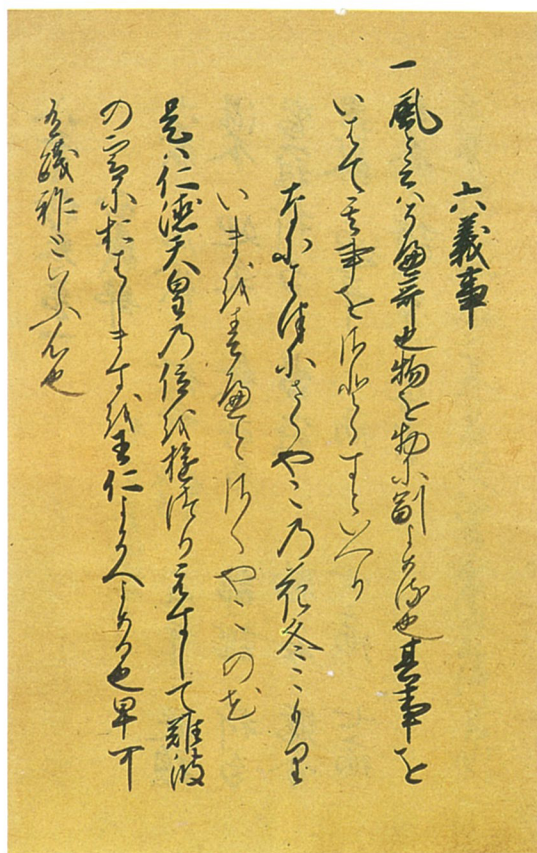


蓬左

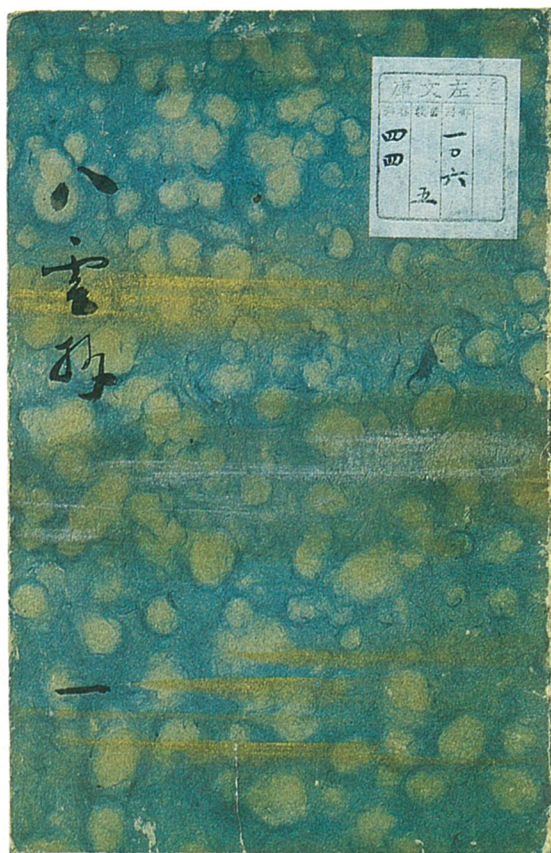
HÔSA No.47

名古屋市蓬左文庫
Nagoyashi Hôsabunko

1992. 4



八雲御抄



5冊(巻三乙、巻六欠) 24.3×15.9cm

承久の乱(1221)で佐渡に流された順徳天皇(1197~1242)の著した鎌倉時代の歌学書。それ以前の歌学書の集大成とも言えるもの。伝本も多く、後世の歌人に与えた影響も大きい。本書は、日野広光筆の伝をもつ室町時代の写本。

本書はまた、有職故実や古典研究の学者で蔵書家として知られ、藩主の右筆を勤めた神村正鄰(1728~83)の旧蔵書。正鄰没後後嗣がなく蔵書を継ぐものがいないことを惜しんだ友人等が藩へ願い出て、門人の鈴木忠貞(1740~81)に神村家を継がせた。しかし、忠貞も45才で没したため、約2000点余の蔵書は藩に接収され、尾張藩御文庫の蔵書となった。

正鄰、忠貞親子の蔵書には、本書をはじめ、山崎宗鑑筆「和漢朗詠集」など国文学関係の善本が多い。また、鎌倉・室町期の三件の「論語」の写本は貴重本揃いで、このうち元応2年(1320)写の「論語集解」が重要文化財の指定を受けている。

蓬左文庫と尾張の蔵書家たち

— 名古屋城の文庫から名古屋文庫への歩み —

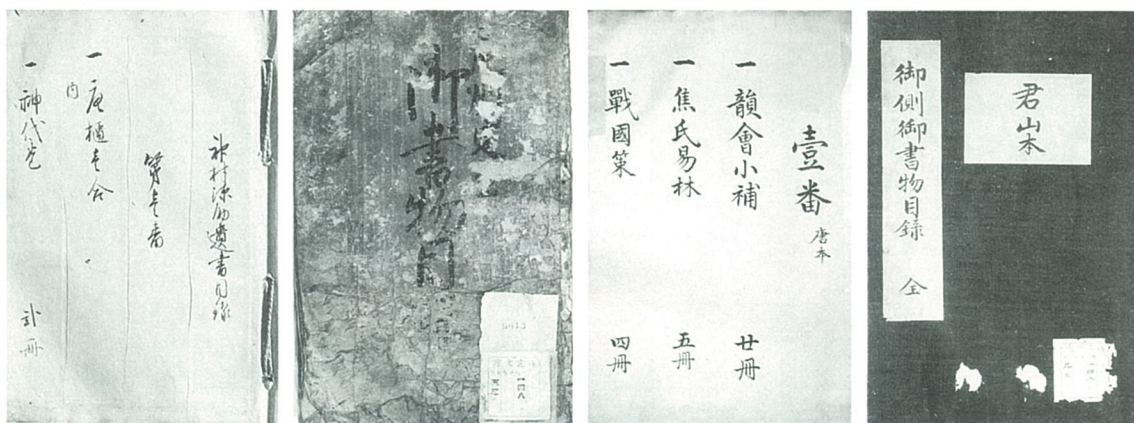
1992. 4.11～5.13、5.16～6.14
7.11～8.12、8.15～9.13

蓬左文庫には、尾張の学者や文化人達の蔵書、著作が数多く伝わり、当文庫の重要な特色ともなっています。これらの蔵書や著作類は、尾張藩御文庫の時代から名古屋市立の機関となった現在までに、蔵書に加えられ、蓬左文庫の蔵書を構成してきました。平成4年度上半期は、蓬左文庫が所蔵する尾張の学者や文化人の蔵書、著作を中心に展示し、藩主の蔵書、藩主の文庫とは異なった側面から蓬左文庫の蔵書を御紹介します。

初代藩主義直が、名古屋城内に御文庫を創設、書物の収集をはじめたころ、この尾張には、有名寺社や、義直が招いた学者達を除いて、蔵書家、学者と呼べる人々はほとんどいませんでした。義直は、書物の収集、編纂事業などの文教事業を推進しますが、御文庫の創設は、名古屋を中心とした江戸時代における学術、文化活動の出発点を象徴するものであったといえます。

名古屋に学者、蔵書家と呼ばれる人々が育ち、全国にもその名を知られるようになるのは、17世紀も末ごろからです。その先駆ともいえるのが、天野信景（1661～1733、国学者、随筆「塩尻」で知られる）や吉見幸和（1673～1761、実証主義の神道学者）で、とくに吉見幸和の膨大ですぐれた蔵書は有名で、藩は、同家邸内に書庫を建て、御文庫に準じた扱いをしたほどです。

中国や日本の古典の収集に熱心であった御文庫に、尾張の学者の著作や蔵書が積極的に納められるようになるのもこのころからです。先述の天野信景、吉見幸和はもちろん、彼らにつづいて尾張の学術、文化を代表した松平君山（1697～1783）、川村秀頼（1718～83）秀根（1723～92）、神村正鄰（1728～72）忠貞（1740～81）等々の蔵書や著作が、御文庫の蔵書の中でも重要な位置を占めるようになります。その中でも、大量にまとまって藩に蔵書が納められた例としては、天明元年（1781）に約2000点の蔵書が納められた神村正鄰、忠貞の蔵書、天保年間頃に納められたとみられる松平君山家の蔵書約1400点があげられます。神村家の蔵書は、養子の忠貞没後、同家



神村正鄰、忠貞の旧蔵書目録

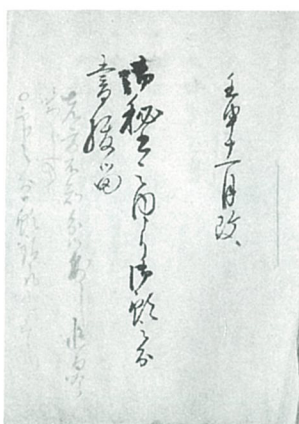
松平君山の旧蔵書目録

尾張藩御文庫における神村正鄰、忠貞親子と松平君山家の蔵書目録。神村家の蔵書目録は、文化、文政年間（1804～29）頃の作成とされる「尾州定置御書物目録」の中に、「神村源助（正鄰）遺書目録」「神村信九郎（忠貞）遺書目録」として収録され、最後に正鄰、忠貞の蔵書が藩に納められるに至った顚末が記されている。

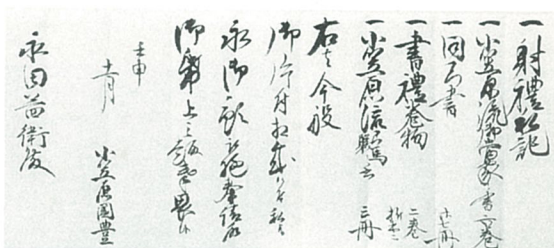
一方、松平君山家の蔵書目録は「御側御書物目録—君山本—」として1冊にまとめられたもの。君山の蔵書が献納されたと推定される天保年間（1830～44）頃の目録で、君山の子霍山、孫南山の蔵書も含まれていたようだ。

なお、これらの目録から、御文庫においては、彼らの蔵書が旧蔵書別に配架され管理されていたことを知る事ができる。

尾張徳川家では、こうした状況に呼応して明治の末ごろから「徳川家維新史編纂所」を設け、大正年間にかけて尾張藩の幕末、維新期の資料の探訪をはじめました。この結果、蔵書を同家に献納する旧尾張藩士の家もありまた、尾張徳川家自身が、市場に出まわった旧藩士の蔵書や資料を積極的に購入したものもあったようです。藩の重臣大道寺家の用人を勤めた水野正信、正遠親子の幕末の世相の記録をはじめとする約750冊の写本や、大著「金城温古録」（名古屋城の各部についての詳細な記録）の編者奥村得義、定親子の集めた写本や草稿約170冊などが蔵書に加わったのはこの頃です。



御秘書之内より御預之分書拔留



一射礼私記
一 小笠原流御當家之書
一 同弓書
一 書礼卷物
一 小笠原流弓馬之書
右者今般
御片付相成候付、私江
永御預被遊、奉請取
御紙上之趣、奉畏候
壬申
十一月 小笠原國豐
永田益衛殿

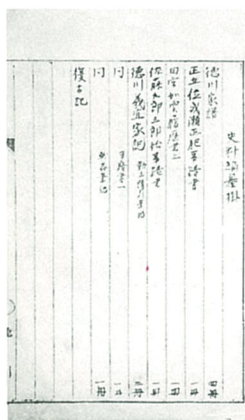
- 3 -

一方、尾張徳川家の蔵書が、蓬左文庫と命名されたのもちょうどこの頃、大正初年のことです。ついで昭和6年(1931)、同家は本格的文庫の公開を旨として財団法人徳川黎明会を設立、これによって、同7年に鈴木信吉旧蔵書(近松茂矩家蔵書)約200点、尾崎良知旧蔵書約2000点、同8年には、中村修旧蔵書約2000点とさらに規模の小さいものも含め尾張藩ゆかりの蔵書家たちの蔵書がつぎつぎと加わることとなりました。しかも、明治の末以降加わった蔵書の中には、明治5年の払い出しによって流出した尾張藩の旧蔵書が含まれていることも多かったのです。

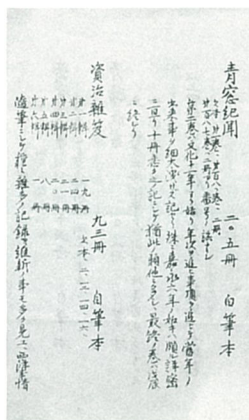
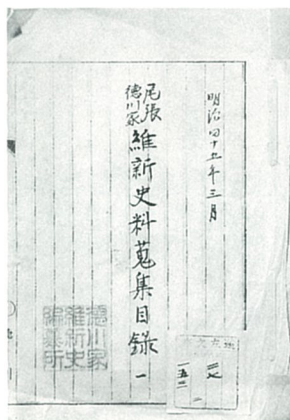
こうして昭和10年、東京目白の尾張徳川家邸内に蓬左文庫は開館し、蔵書の公開がはじまりました。しかし第二次世界大戦の敗戦をへて、蔵書の散逸はまぬがれたものの昭和25年には、蓬左文庫は財団から名古屋市へ譲渡されることとなり、昭和26年からは、名古屋市蓬左文庫として活動が開始されました。市立の機関となってからも、幕末の尾張の国学者山田千疇の旧蔵書、代々礼法をもって藩に仕えた小笠家の伝書、津島の旧家で、堀田知之などの文化人を出した堀田家の蔵書など、新しく尾張藩士や文化人の蔵書が加わっています。さらに、尾崎久弥コレクション、小酒井不木文庫など近代の名古屋の蔵書家のものも加えられており、すでに現在では所蔵資料10万点の内、名古屋市移管後の蔵書が3万点を越えています。

初代尾張藩主義直が、父家康から譲り受けた駿河御讀本3000冊を基礎に御文庫を創設してから370年余、藩主の文庫として尾張に学術文化の種をまいた蔵書群は、その結果として多くの学者、文化人の蔵書を吸収発展し、今日の蓬左文庫にいたっています。蓬左文庫の命名は、蓬左城(名古屋城)の中に所蔵されていた書物を伝える文庫という意味に由来しますが、蓬左文庫は、名古屋を中心とする尾張の学術文化の足跡を象徴するまさしく蓬左文庫(名古屋文庫)への道を歩んできたと言えるのではないのでしょうか。

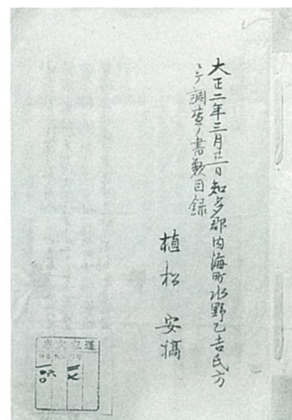
* 5～6 ページに掲げた「蓬左文庫の蔵書を構成する尾張の蔵書家、学者の蔵書一覧(1)」および「印譜」は、紙面の都合上、今回は、明治初期頃までに収集された蔵書群で、ある程度点数がまとまって入庫したものだけに限らせていただきました。これ以外にも、当文庫には多くの尾張の学者、文化人の蔵書が所蔵されており、印記も数多く見られます。これらについては、次号以降に機会を見つけて整理し、御紹介させていただきます。



尾張徳川家維新史料蒐集目録



水野乙吉方ニテ調査ノ書類目録



明治年間の末に設立された、徳川家維新史編纂所の収集資料目録と、大正2年に行われた水野乙吉家(水野正信の子孫)の資料調査の際の目録。この事業は第19代当主徳川義親(1886～1976)が明治44年(1911)、東京大学史学科卒業後まもなく着手したもので、同年に設立され、文部省内に事務局を置いた「維新史料編纂会」の事業に呼応するものであったと思われる。この目録には、旧尾張藩士とみられる資料所蔵者の他、史料編纂所の前身史料編纂掛や、維新史料編纂局の名も見える。一方、水野家の調査は、この維新史料蒐集事業の一環として行われたもので、目録に記された蔵書は調査後まもなく尾張徳川家に納められ、現在当文庫蔵。

なお、徳川家維新史編纂所が収集および編纂した資料も、現在当文庫に所蔵されている。

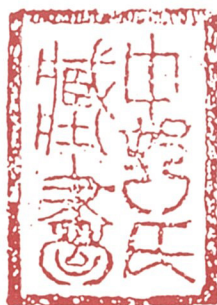
蓬左文庫の蔵書を構成する尾張の蔵書家・学者の蔵書(1)

蔵書家名	履歴等	蔵書内容、点数、入庫時期等	印番譜号
近松茂矩(1696～1778) 他	四代藩主吉通に小姓として近侍した茂矩以来、長沼流軍学を家学として代々軍学をもって仕える。茂矩の孫矩弘は勤皇家としても知られる。	茂矩の著作を中心に約200点余。昭和7年尾張徳川家の家令鈴木信吉氏の手をへて納められた。さらに昭和59年には、近松家から軍学免状など6点が寄贈。	(1) (2)
松平君山(1697～1783) 霍山(1718～82) 南山(1744～1832)	君山は、江戸中期、尾張の学会の中心人物。初の官撰地誌「張州府志」、藩士の系譜集「士林派洄」などを編纂。君山、南山ともに御書物奉行を勤める。	漢籍中心。内容は多義にわたり、君山の著作および尾張関係の著作も含まれる。藩の御文庫への入庫は、南山の没後、天保年間(1830～44)か。当時の目録記載点数は約1400点、現蔵は約5分の1程度。	(3)
中村厚斎(1711～79) 習斎(1719～99) 直斎(1756～1839) 得斎 修(1843～1915)	代々尾張藩士、漢学者。とくに習斎は、闇斎派の学者としてすぐれ、家塾を開き、藩主への講義も行なった。また修は、幕末に勤皇家として活躍後、明治22年、初代名古屋市長を勤める。	嘉永4年習斎を中心とした闇斎学派の未刊の論稿を習斎がまとめた道学資講400巻を献納。現在も当文庫蔵。代々の蔵書は、昭和8年、当時の徳川黎明会へ寄贈され、中村修旧蔵書として約2000点が現蔵。	(4) } (12)
奥村元儒(1718～93) 得義(1793～1861) 定(1835～1918)	尾張藩下級武士。得義が名古屋城の調査を命ぜられたのを機に名古屋城についての記録「金城温古録」の執筆にとり組む。このために収集された蔵書が数百冊をこえた。定氏は名古屋市史編纂にも参加。	万延元年、「金城温古録」全64巻の内31巻を献納。さらに前後して数十点の収集した記録が納入された模様。残りの蔵書は、定氏没後散逸、一部が大正から昭和の初めに尾張徳川家蔵となる。現在約230点が当文庫蔵。	(16) } (21)
堀田知之(1719～97) 他	津島神社祠官の流れを汲む旧家。六世知之は、国学はじめ、和歌、俳諧その他諸芸に通じ、文人として知られた。	国学、和歌、俳諧に関するものを中心に約1500点、大半は知之の編著もしくはその筆になる写本。昭和57年寄託。	★
神村正鄰(1728～72) 忠貞(1740～81)	律令、有職故実研究の学者。正鄰は、八代藩主宗勝の右筆を勤める。忠貞は正鄰の門人、正鄰没後特例により養子となる。	忠貞没後、天明元年、歴史、律令、有職故実を中心に約2000点余が藩に接收、御文庫蔵となる。約5分の1が現蔵。城絵図、国絵図など数百枚におよぶ絵図のコレクションをも含む。	(13) } (15)
小笠原国輔(1761～95) 国雄(1784～1820) 国軌(～1849) 他	故実礼法をもって代々尾張藩に仕える。安永9年、五代目国輔の時に藩主宗睦の命により江戸の小笠原兵衛家へ入門、以後代々小笠原流の伝書を書写して持ち帰る。	小笠原流の伝書を中心に、職務上の勤書、書状など含め5000点、昭和46年寄贈。	
水野正信(1805～69) 正遠(1835～1900)	尾張藩重臣大道寺家の用人。幕末の世相や、外国情報にかかわる500冊を超える蔵書を残している。	幕末の世情の記録「青窓紀聞」204冊、外国、海防関係の著作を集めた「青牖叢書」103冊をはじめ約770点余。大正3年頃、入庫。現在にいたる。	(22) } (24)
山田千疇(1811～76) 直臣	千疇は、尾張藩士で国学者、明倫堂国学助教授見習、その子直臣も学者、名古屋市史編纂にたずさわる。	歴史書などの蔵書、自筆稿本など約260点。昭和37年寄託。	(25) (26)
尾崎良知(1840～1901)	十四代藩主慶勝の側近として幕末動乱期に活躍。のち塾を開いて儒学者の道に専念する。徳川家顧問。	大部な漢籍が中心。約2000点、明治初年の尾張藩払出し本を含む他、他家の旧蔵書を数多く含む。昭和7年寄贈。	(27) (28)
五味末吉家	代々尾張藩の武家故実方を勤めた。末吉氏自身は、尾張徳川家家職、のち黎明会常務理事を兼務。	武具、服飾など武家故実に関する蔵書約420点。明治初年に尾張藩から払い出された書物をも含む。昭和7、8年頃寄贈。	(30)

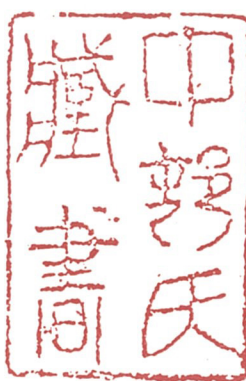
★「堀田文庫蔵書目録」(名古屋市蓬左文庫刊)参照



(1) ◀ 鍊兵堂



(4)(5) ◀▶ 中邨氏藏書



(11) ◀ 習齋



(12) ◀ 中邨氏



(2) ▲ 尾張國名護屋城坤廣井縣鍊兵堂藏本



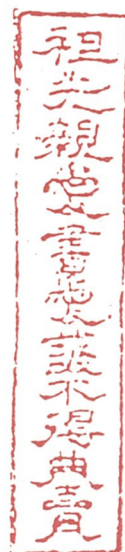
(6) ◀ 尾張中村圖書



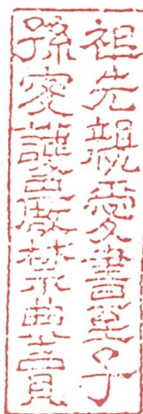
(8) ◀ 尾張中村圖書



(13) ◀ 神邨家藏



(7) ◀ 祖先親愛書愛護不得典賣



(9) ◀ 祖先親愛書愛護不得典賣



(14) ◀ 神邨家藏



(3) ◀ 竜吟



(10) ◀ 尾張中村書庫



(15) ◀ 尾藩神邨恭敬齋藏



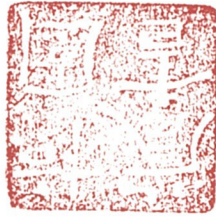
松譽居 (21)



圖松印 (19) (20)



家栽印 (25)



藏松書園 (26)



五味家藏 (30)



藏鈴書木信章 (29)



元臣傳 (18)



道季



傳元 (17)



好古亭 (16)



醉讀堂 (23)



正水信野 (24)

定士



藏尾書崎氏 (28)



圖水書野之正信 (22)



知尾書良 (27)

出版物一覽

名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録(S .50年刊) 3,500円
 名古屋市蓬左文庫国書分類目録(S .51年刊) 4,000円
 名古屋市蓬左文庫古文書古絵図目録(同) 2,500円
 尾崎久弥コレクション目録第一〜三集 各 1,500円
 名古屋叢書(正編)索引・総目録(S .53年刊) 2,000円
 名古屋叢書総編 索引(S .47年刊) 700円
 名古屋叢書続編総目録(S .44年刊) 400円
 善本解題図録第一〜三集(S .55年再版) 各 300円
 蓬左文庫・源氏物語図録(S .53年刊) 300 円
 蓬左文庫所蔵古地図複製 No. 1 〜No.15(S .55〜61年刊)
 各 1,800円

1. 尾府名古屋図
2. 尾州名古屋御城下之図
3. 名古屋図
4. 尾張八郡図
- 5〜15. 尾張志付図
5. 尾張図
6. 愛智郡東
7. 愛智郡西
8. 春日井郡
9. 智多郡
10. 熱田
11. 丹羽郡
12. 海東郡
13. 海西郡
14. 中島郡
15. 栗栗郡

御本印型書鎮(S .58年製) 1,000円
 堀田文庫蔵書目録(S .58年刊) 500円
 蓬左文庫絵葉書< 8 枚組>(同) 300円
 蓬左文庫図録(同) 1,500円
 蟹江慶次郎旧蔵書目録(S .62年刊) 500円

名古屋叢書三編 全19巻20冊(S .56〜63年刊) 各3,000円

1. 尾張徳川家系譜
2. 尾藩世記 上
3. 同 下
4. 士林派廻続編
5. 尾張年中行事絵抄 上
6. 同 中
7. 同 下
8. 張州年中行事鈔・尾張俗諺・尾張童遊集
9. 松濤棹筆(抄) 上
10. 同 下
11. 楽寿筆叢・十如是独言
12. 葎の滴 諸家雑談・家事雑識
13. 天保会記鈔本
14. 金明録
15. 尾張方言・水かはり・浪越方言集・宮説言葉の掃溜・雅語訳解・俗語弁
16. 横井也有全集上 (発句・和歌編)
17. 同 中 (俳文・俳論俳話編)
18. (1) 同 下(1)(連句・漢詩文編)
18. (2) 同 下(2)(狂歌・談義・伝記資料・追加・参考編)
19. 物品識名・物品識名拾遺・本草会物品目録・泰西本草名疏

名古屋叢書三編総目録・索引(H .2年刊) 3,000円

★以上の出版物は、本文庫事務室において頒布しています。
 郵送希望の方は郵送料が必要ですので、お問い合わせ下さい。(ただし、古地図複製は郵送不可)

利用ご案内

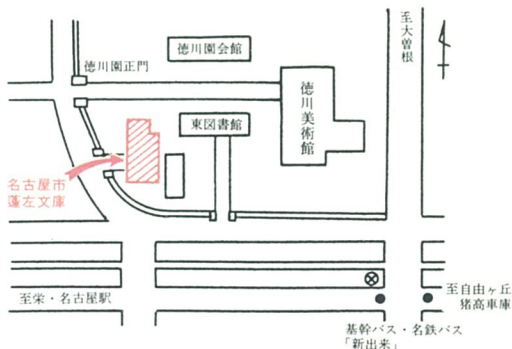
- ▷開館時間 午前9時30分〜午後5時
- ▷休館日 毎月曜日・第3金曜日(館内整理日)
 祝日(日曜に重なる場合は日曜開館、月・火休館)
 特別整理期間
 年末年始(12月28日〜1月4日)
- ▷閲覧 館内に限り、館外貸し出しはいたしません。
- ▷展示 随時蔵書の一部を展示
 (特別展を除き入場無料)
- ▷複写サービス 保存上影響のないものについて複写サービス(マイクロフィルム利用他)を行います。ご来庫の上、ご相談下さい。

名古屋市蓬左文庫

〒461 名古屋市東区徳川町1001番地

☎(052) 935-2173

〈名古屋駅から〉市バス「基2」「自由ヶ丘」「猪高車庫」行
 名鉄バス「本地ヶ原方面」行
 〈栄から〉市バス「基2」「引山」「自由ヶ丘」「猪高車庫」行
 「新出来」下車、徒歩4分



「蓬左」第47号 ☆平成4年4月11日発行 ☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫(東区徳川町1001番地)

☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷：大同印刷株式会社(東区泉2-3-18)